

令和5年度

共創する生徒



研究紀要



研究に かけた 思い

本校の研究は、生徒の「目を輝かせていきいきと学ぶ姿」を引き出すために、教材開発や単元構想、新たな気づきを促す場の設定、ICT活用など、生徒の学びを深め、自ら学ぶ姿を引き出すための教師支援に取り組んできた。その取り組みの中で、学びを教室に閉じず、当事者や専門家等の方々と共に学ぶ場を設定したことで、より主体的に活動したり、学びの有用性を感じたりする姿が見られた。

そこで、生徒のいきいきとした姿をより引き出すためには、「誰と共に」「何を創るか」が重要であると考えた。この願いから本年度は、「共創する生徒」と研究主題を設定した。学びを教室に閉じず、生徒の思考に寄り添い続けることで、より深い学びを目指す。

研究主題

研究主題

共創する生徒

— 多様な他者と共によりよい考えを創る —

問題に気付く力

考えを深める力

学びを表現する力

「共創」を実現する3つの力

愛知県刈谷市立刈谷南中学校

問題に気付く力

特別支援教育

カッコいい店員さんになりたい

—— 自立活動 「状況に応じたコミュニケーションに関すること」より ——

職場実習に向けて、困っていることを相手に伝えたり、報告をしたりするために「刈南中実習心得」に沿って、話形を覚えたり、話し方の練習をし、職場実習に臨んだ。バザーに向けてさらによりよい接客ができるようにするために「新刈南中実習心得」を作成する課題を設定した。

休日に買い物に出かけて見つけた「店員のカッコいい姿や気持ちのいい態度」を発表し合い、目指す姿を確認した。いらっしやいませ班、接客班、レジ班に分かれて、第1回模擬バザーを実施した。接客班を担当したAは、仲間から、声の大きさや目線についてのアドバイスをもらった。Aは、練習タイムで教師が実演する店員が客役の自分を少しも見えてくれないことを不快に感じ、接客時に大切な店員の態度について考えた。また、自身の接客の様子を撮影した動画を見て、自分の声の大きさや目線を客観的に認めることができた。

Aは、接客をする時には、相手の方をしっかりと見て、聞き取りやすい声の大きさを話すことが、「カッコいい店員さん」につながることに気付き、第2回模擬バザーに生かすことができた。そしてAは、「新刈南中実習心得」に、「目線」と「声の大きさ」についての文言を加える案を発表することができた。

模擬バザーを行うAの様子



体育

元の位置に戻っちゃうから入れ替わりができないんだ！

—— 2年「バドミントン ミックスダブルスを極めよう！」より ——

中学生全国大会の映像を視聴し、生徒はダブルスのよりよい連携について知見を広げた。しかし、ゲームの中で思うような連携ができない状態が続いた。そこで、地元企業ジェイテクトのプロバドミントン選手に協力を仰ぎ、専門的な技術指導を受け、改めて自分たちの課題を見直す場を設定した。

Aは、技術指導を受ける前に、今のペアの課題について考えた。そこで、ペアのフォーメーションについて「ゲーム中に守備的なサイドバイサイドから攻撃的なトップアンドバックに入れ替え、攻撃の主導権を握りたい」という思いをもった。その思いを実現させるために、プロ選手に試合の様子を見てもらった後、「どうすれば試合中に入れ替われますか？」と質問した。プロ選手は、「どちらかが前に出る瞬間があるけど、そのときに元の位置に戻ってしまうと、いつまでもサイドバイサイドのままだよ」と指摘した。Aは「そういうことか！」と納得し、ペアと「もし私が前に出たら、Bが下がれば縦になれるね」と具体的な動き方について議論を始めた。

Aは、「プロの方に教わって、元の位置に戻っちゃうから入れ替わりができないということに気付きました。これでできそうな感じがするので、ペアの動きに合わせて前後に動く練習を試してみたい」と振り返り、自分たちの連携の問題に気付き、次時の課題解決に向けての思いを高めた。

プロ選手からアドバイスをもらうA





美術

他者と関わり合うことで自分の作品を客観的に見直す — 3年「空想画 ～15歳のわたし～」より —

思春期真っ只中の15歳の思いを空想画で表現した。自己満足で終えるのではなく、作品を観た人に、作者の思いや考えをより伝えるために、制作途中でお互いの作品のよさや改善点について話し合える場を設定した。

Aは、今の自分に必要のないものをゴミ箱に捨てるという内容の作品を描いた。アドバイス会の中で、Aは作品についてのコメントに目がとまった。Aは下描きの段階で、自分の思いをうまく伝えられていないことに気付いていた。タイムリーに実施したアドバイス会での友達の意見から、絵の向きを変えることで、「不要なものを捨てる」のではなく「必要なものをもらう」という、作品の見せ方や視点が変化し、作者の思いが伝わることに気付いた。

Aは感想に、「アドバイス会を通して、発想の転換をすることの大切さに気付かされました」と書き、自分の思いをよりよく表現するための視点を工夫し始めた。

Aの試作の変容（コラボノートより）



スマホなどの楽しいものを捨てて船旅に臨もうという気持ちが伝わりました。
船旅中にスマホを触らないようにしようとしているのが伝わりました。床もカラフルでいいなと思いました。
スマホをあまり見ないようにしようという気持ちが伝わりました。

船が横向きになって気づかなくて不思議な空間だなと思いました。逆さにしたり見え方に変化を与えたりするだけで、何だろって自然と不思議な船になるんだって思いました。

技術

板一枚で作品の強度は大きく変わる — 1年「家庭の物を整とんしよう」より —

木材の繊維方向によって作品の強度が大きく変わることを知った生徒は、自分の作品も長く使用するために、特に強度にこだわって製作したいと考えた。そこで、実際に木材で製作する前に試作を行い、作品について追究する場を設定した。

試作を見てAは、「板の組み合わせ方によって強度が変わるのか」「本を入れたときに最も力がかかる場所はどこなのか」と疑問をもった。より強度を上げられる方法を見つけようと本の模型を置いて試作に負荷をかけてみたり、班の仲間と相談したりしながら試作に何度も手を加えた。

Aは、「試作をせずに本製作をしていたらすぐに壊れる本棚ができていました。板一枚で作品の強度は大きく変わることを実感しました」と振り返った。仲間と関わりながら作品を見つめ直したAは、強度を高め、より長く使える作品を作るために本製作へと動き出した。

Aの試作の変容

修正前



修正後



考えを深める力

道徳

桃太郎が全て正しい、全て間違っているとは思えない — 2年「桃太郎の鬼退治」より —

「桃太郎」の話の結末が本当に「めでたし、めでたし」だったのかという視点から、桃太郎と鬼の立場に生徒を分けた。両者の思いを考えることができるように、それぞれの立場の状況が分かる資料を提示し、対比させながら話し合う場を設定した。

鬼側の意見を聞いた桃太郎側のAは、「桃太郎の正義は鬼退治。桃太郎は悪いのか」と発言した。話し合いを続ける中で、生徒たちは「ボクのおとうさんは桃太郎というやつに殺された」と書かれた子鬼のポスターを見た。その後、再度話し合いを通して「桃太郎は悪いのか」というA自身の当初の考えに迷い始め、「どっちもぎりぎりの状態だった」と鬼側に歩みよる発言をした。

Aは、互いの立場の思いを知ったことで、「桃太郎が全て正しい、全て間違っているとは思えない」と振り返った。考えを伝え合ったり受け止めたりすることを大切にしていこうと、互いを理解できるだろうと考え始めた。

【資料】 桃太郎と鬼の立場に分かれて出し合った生徒の考え



国語

書きたかったことが読み手に伝わる作文を書こう — 1年「事実をきちんと見つめた作品を作ろう」より —

生活作文の下書きを作成した後、自分の文章で伝えたいことが、より相手に伝わりやすくするために文章を推敲する場面を設定した。推敲をするにあたって、いちばん書きたいことの周辺を詳しく書くということのイメージとそのよさを理解させるべく、生活作文において「よい例」と「いま一つな例」の2つのモデル文を比較し、気付いたことを話し合った。

Aは話し合いの中から、「よい例」から「理由」や「どのように」「周りの様子」を詳しく書いたり、会話文を取り入れたりすることで、状況や心情が分かりやすくなっていると気付いた。また、生徒たちは、得られた視点をもとに互いの作文の下書きをグループごとに読み合い、気付いたことを伝え合った。

Aは、学級の仲間と話し合ったことを通して、「『よい例』の文とBさんの文に会話文が多く使われていて分かりやすかったので自分もどんな会話をしていたかを思い出してもう少し増やしたいと思いました。また、そのときの周りの景色や空気感のことも書いていきたいです。なので、より深く伝えたい場面を決めて改善していきたいです」と振り返った。より読み手に伝わる書き方に気付いたAは、自分の作文を見つめ直し、作文を書き直し始めた。

【資料】 モデル文比較時の話し合い

「よい例」：①

「いま一つな例」：②

A：①の文章では、何が嫌でそのときどう思っていたのかが、周りの景色のことからも分かりました。

B：Aさんに似ていて、①の文章では、会話文が多く、登場人物の笑い方や声の出し方も分かるから、心情がより伝わりやすくなっていると思います。

C：Aさんに付け足しで、②の文章だと、思ったことが短い言葉でしか書かれていないから読み手に深く伝わらないと思います。



社会

刈谷藩にとって、百姓は経済を支えてくれている大切な存在 —— 2年「近世の日本～百姓と武士はどんな関係？～」より ——

生徒が、江戸時代の百姓一揆の7～8割が成功していることに疑問をもった。そこで、刈谷で起こった寛政一揆が成功した理由を物語資料から考える場を設定した。

Aは、最初「刈谷藩は大きな騒ぎになることを避けたかったのではないか」と考えていた。「物語のどの部分から読み取ったのか」と問うと、「百姓どもをけちらせと言っている藩士に対して、そんなことをしたらますます騒ぎが大きくなってしまおうと言っている藩士がいる」と発言した。そこで、「藩が百姓を武力によって抑えなかったのはなぜだろうか」と問い、話し合い活動を通して、藩側の視点で考えていたAは、「百姓は藩の経済を回して、いなくなると藩が困るから」と、百姓側の視点で考えるようになった。

Aは「藩にとって百姓は経済を支えてくれる、とても大切で大きな存在である。そんな大切な百姓の反感を買って信用をなくしてしまえば、藩は消滅してしまう。だから藩は百姓の意見を聞き、一揆を成功させた」と振り返り、江戸時代の百姓と藩の関係性を、双方の視点から見つめ直し始めた。

【資料】グループでの話し合い活動の記録

- T：藩が百姓を武力によって抑えなかったのはなぜでしょうか。
- A：藩としては、百姓がいてくれないと年貢を納めてくれる人がいなくなるからだと思います。
- B：百姓は、お金としても食糧としても大切なお米を作っていて、この人たちがお米を作ってくれなくなったら、藩（武士）が困るからだと思います。
- A：百姓の視点で考えたんだね。つまり、百姓は江戸の経済を回している人々ということかな。



音楽

表現方法が少し違うだけで、聞いている人に伝わる気持ちや景色がすごく変わってくる —— 1年「曲想と音楽の特徴との関わりを感じ取って聴こう」より ——

歌曲「魔王」の鑑賞を通して、作曲者が強弱や旋律の音高、伴奏の形などを巧みに変化させることで、登場人物の気持ちや情景の移り変わりを表現していることを知った。さらに、歌手による表現方法の多様性に気付くことができるように、「魔王」の最後の部分について2人の歌手の歌い方を聞き比べ、意見を出し合う場を設定した。

Aは、声の音色や間の取り方の違いに着目した。「1人目の歌手は、息をたくさん使ってはっきりとした声で力強く歌っていて、間が少なく、父親が衝撃を受けたような感じがした。2人目の歌手は、弱々しい声で間をたっぷりとり歌っていて、衝撃というよりも父親が悲しんでいるように感じた」と、意見を発表した。

Aは、「同じ歌詞でも、声の音色や間の取り方など表現方法が少し違うだけで、聞いている人に伝わる気持ちや景色がすごく変わってくることがわかった」と振り返った。作曲者が楽曲に込めた思いを読み取り、どう表現したいか考えをもって歌うことの大切さに気付いたAは、自身の歌声を見つめ直し、より思いが伝わる表現方法について深く考えるようになった。

歌い方の違いについて意見を出し合う生徒



学びを表現する力

数学

式は簡単に表せるけど、表やグラフの方が伝わりやすい場合もある
—— 1年「落雷地点までの距離を調べよう」（比例の利用）より ——

比例や反比例を学んだ生徒たちは、日常生活の中に比例や反比例の関係になっている事象がたくさんあることを知った。そこで、比例や反比例の関係について根拠をもって説明することができるように、落雷距離に関する観測データから音速の違いに気付き、気温と音速の違いから比例関係を見出す活動を行った。

比例関係であることを説明するには、式が分かりやすいと考えたAは、比例関係を式でまとめていた。その後、グループでの話し合いや全体発表を通して、「表を用いて考えると、数字を並べ替えられるから見やすくなる」「グラフだと気温と音速の関係がとても見やすい」と、いろいろな考え方や表現方法を知った。

Aは、「みんなの考え方を聞いて、式は簡単に表せるけど、表やグラフの方が伝わりやすい場合もあるし、同じ式でも考え方や説明が違っていた」と振り返った。それぞれの表現による伝わり方を知ったAは、どんな数学的根拠を用いたら相手に伝わりやすいかを考え始めた。

Aがいるグループの話し合い活動

B：私は、表を使って考えました。表を見ると1℃で毎秒0.6mはやくなるので、逆に-10℃なら、毎秒6m遅くなると思い、秒速321mの速さだと分かり、それに8秒をかけて2568mだと思っています。

他の生徒：あ～なるほど～

B：なにか質問ありますか。

A：なんで表を使って考えようと思ったんですか。

B：観測データを見やすいように並べたかったからです。

A：確かに並べ替えたほうが見やすいね。

B：それでは、次はAさんお願いします。

A：私は $y = 0.6x$ という式を作りました。理由は気温と音速が比例していると思ったからです。あとは、-10をxに代入して速さを求め、8秒とかけました。

B：では質問のある人からどうぞ。

C：式で考えようと思ったのはどうしてですか

A：式は1回つくればどんな気温でもすぐ求められて便利だと思ったからです。



理科

密度で説明できることが周りにもたくさんある

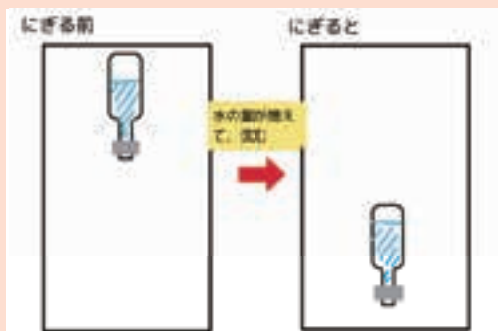
—— 1年「身近な物理現象～密度の違いによって起こる現象の秘密を解明しよう～」より ——

密度の小さい物体が浮き、密度が大きい物体が沈むことや、密度の計算の仕方や密度の大きさがそれぞれの物質で決まっていることを生徒たちは学習した。そこで、質量と体積の変化によって密度が変化することを見いだせるように、ガリレオ温度計や浮沈子を紹介した。

浮沈子が入ったペットボトルを握ると、浮沈子が沈むようすを見たAは、「ペットボトルを押すと浮沈子に水が入り、重くなって沈む」と考えた。クラス全体で話し合い、「浮沈子の質量は大きくなる」や「容器を押しても浮沈子の体積は変わらない」という意見を聞いて、Aは重さではなく、密度が関係していることに気付いた。「質量が大きくなり密度が大きくなる」と考え、浮沈子の仕組みを質量変化によって密度が変化するという関係を表現することができた。

「浮いたり沈んだりしているものは密度が関わっていて、勉強した密度で説明できることが周りにもたくさんある」とAは振り返り、科学の有用性を実感したAは、身の周りの事象に対して科学的に考え始めた。

Aの最初の考えの図と、授業後の考え



今回の実験で浮沈子の空気が圧縮されて水が入ることで、質量が大きくなり密度が大きくなって、密度が大きいと沈むので、そこが関係していると思います。

英語

笑いながら頷いてくれたことがうれしかった — 1年「Friends in New Zealand」より —

「英語の授業で期待すること」というアンケートで、多くの生徒が「外国の人と触れあうこと」と回答した。そこで、アメリカに住む外国人からのメッセージ動画を視聴し、グループに分かれて、日本について紹介する動画を撮影する場を設定した。Aは「自分の力を試したい」という思いをもって準備を始めた。

Aは、日本のスポーツについて紹介するときに、はじめは写真を見せながら「This is sumo. It is a Japanese traditional sport.」と説明することを考えていた。しかし、グループの仲間と話し合う中で「動画だから実際にやりながら説明したら分かりやすいと思う」という意見が出たことから、「A: What are they doing? B: They are doing sumo. They push each other.」と、ジェスチャーを交えた会話形式での説明に改善し、どうしたら相手に伝わるか工夫してまとめることができた。

Aは「1人だったら、ただ説明をして終わっていたかもしれないけれど、グループの仲間とどうしたらより相手に伝わりやすくなるかを話し合うことで、新しい表現方法に気付くことができた。外国の人の方が私たちの動画を見ている時に、笑いながら頷いてくれたことがうれしかった。今度は直接話したい」と振り返った。英語で伝える喜びを実感したAは、自分の思いを直接英語で伝えることができるようにしようと動き始めた。

実際に動画撮影をするA



家庭科

他の食材を使って、家でも作ってみたい

— 1年「食生活の自立・6つの基礎食品群をバランスよく食べよう」より —

生徒たちは、普段の食生活において、献立を考えることはほとんどなく、作ってもらった食事を摂ることが多い。そこで、食生活の自立を促すために、6つの基礎食品群をバランスよく摂取できるピザトーストを実際に調理することにした。その際、より食に関心をもつことができるように、試食の際は五感を使って味わうことができる場を設定した。

ピザトースト作りの際、Aは玉ねぎのシャキシャキとした食感を残すことにこだわり、焼き加減を調整した。調理実習の後、オリジナルトーストを考える時間を設定した。Aは、彩りのあるピザトーストであれば、6つの基礎食品群がそろった食事ができると考え、「色とりどりのピザトースト」を考案した。工夫したこととして「最初はトウモロコシとピーマンを入れていなかったが、茶色ばかりになってしまったので、見栄えを工夫して明るい色の食材を使った」と振り返った。

Aは「6つの基礎食品群を使って簡単に作ることができたので、今回考えたように、他の食材を使って家で作ってみたい」と、食生活の自立に繋がることを考え始めた。

Aが考案したピザトースト



帯活動

相手のことをよりよく知るための質問の仕方が分かってきた — 「朝から楽しく、かりなんトーク」より —

生徒たちが、相手の立場に立って考えを伝え、共感しながら聞くスキルを身に付けるために、4月から毎週月曜日、朝の会の前に1つのテーマを設定して生徒同士でトークを繰り広げる「かりなんトーク」を全校実施した。

かりなんトークは4人グループになって、教師が与えるテーマ（一番好きな季節は？10万円もらったなら何をします？など考えやすいもの）にそってトークをし、1人が1分間自分の考えを発表し、残りの3人が質問をしていく形を4回繰り返す。そして、最後にトークの内容を全体で発表する。実施当初はなかなか会話が弾まない様子だったが、だんだんと慣れてきて、時間が足りないくらい熱心にトークをするようになった。

この時間を通して、Aは「お互いのことをより詳しく知り、絆を深められた。また、相手に考えを上手に伝える方法や相手が話しやすい聴き方、相手のことをよりよく知るための質問の仕方が分かってきた」と振り返り、他者と共感するためのよりよい方法を見つけることができていた。

かりなんトークの様子



研究の成果

研究の成果と次年度の構想

本年度の取組みを振り返ると、多くの生徒たちが、問題解決のために意欲的に思考に取り組み、生徒同士や教師や専門家など、さまざまな考えをもつ他者と関わり合い、よりよい考えをもつことができていた。生徒たちは多様な他者と関わり合いながら、考えを積み上げることの大切さに気付いたように感じる。

本校では、次年度も引き続き研究主題を「共創する生徒」と設定し、多様な他者と共によりよい考えを創る授業を目指す。そのための手だてとして、①共創する姿を生み出すかりなんトーク ②共創する姿を支える教師の体制づくり ③共創する姿を引き出す単元づくりの3つを工夫する。特に「かりなんトーク」については、各教科の授業でも活用したいと考えている。「課題に気づく力」「考えを深める力」「学びを表現する力」を育むために、多角的に、そして多様な方法で生徒にアプローチし、生徒の「共創」をより高めていきたい。

次年度の 研究

共創する生徒

～多様な他者と共によりよい考えを創る授業を目指して～



課題に気づく力・考えを深める力・学びを表現する力

手だて1

共創する姿を生み出すかりなんトーク

手だて2

共創する姿を支える教師の体制づくり

手だて3

共創する姿を引き出す単元づくり